

『ルポ 食が壊れる』紹介

写真は国際ジャーナリスト・堤未果さんによる「私たちは何を食べさせられるのか？」という副題の文春新書、2022年12月発行。大阪日日新聞1月23日に堤さんの発言を交えて本書が紹介されている。

「今だけ、金だけ、自分だけ」というグローバル資本主義の論理が人々の身近な暮らしを脅かしていると、緻密な取材を基に訴え続けてきた国際ジャーナリストの堤未果さん。新著で挑んだテーマは「食」と「農」だ。「食べ物は私たちの肉体だけでなく、価値観や社会もつくる。今起きていることは、食と農の多様性に仕掛けられた戦争だと思っています」



遺伝子組み換え技術を使った「人工肉」や「養殖魚」、ゲノム編集食品にデジタル農業……。新著では、新型コロナウイルス禍、ロシアのウクライナ侵攻に伴う食料不安や、気候変動対策として持続可能な開発目標(SDGs)が称揚される風潮を背景に、グローバル企業による「食と農の画一化と支配」が着々と進む世界の現状を暴いた。「食料危機も気候変動も、テクノロジーで何とかできると彼らは言う。でも食の安全保障とは、単に食料が十分にあることではなく、世界各地の風土に合ったおいしく安全なものを食べる私たちの権利が、きちんと守られていることを意味するはずです」経済効率や生産性の向上、統一規格による貿易に最適化した大量生産・大量消費型のアグリビジネスと、それらを増強する科学技術が急速に発達する中で「忘れてはいけないキーワードは主権だ」と力を込める。「少数の企業が世界の農と食をシステムティックに管理することになれば、食べ物を作ったり選んだりする私たちの権利が消滅してしまうかもしれない」そんな危機感から後半では、化学肥料や農薬を使わない農業の実践や、土着の微生物を生かした土壌の再生、地域の農作物を学校給食に取り入れる食育活動など、「画一化」にあらがう国内外の取り組みを紹介した。「未来は絶対的に未知数だと信じている」と堤さん。「ディストピアのような世界に突き進んでいる事実を知ってもらった上で、それでも私たちの足元にはまだ、たくさんの宝物があると一番に伝えたかった。多くの人々が気付いていない素晴らしいことに光を当てるのも、ジャーナリズムの仕事ですから」

堤未果さんの『ルポ 貧困大国アメリカ』『日本が売られる』『デジタル・ファシズム』などを読んできたが、本書からも多くの示唆を得ることができた。国際ジャーナリストらしく、国内外の幅広い取材と資料にもとづく鋭い問題提起で、ベストセラーとなった「デジタル」に続く「フードテック」ファシズムに警鐘を鳴らす。

前半の「食が壊れる」現実を危惧する一方、後半の国内外の取り組みから、食と農の未来に希望も感じることができた。キーワードは「主権」と「権利」ではないだろうか。

(2023年4月10日)